



森のちやれんがニュース

2017 冬

Newsletter vol.10


**博物館と市民をつなぐ博物館支援組織まつり
『北のみゆぜふえす』を開催**

北海道博物館と一般財団法人北海道歴史文化財団は、野幌森林公園内各施設の堅固なネットワークづくりを基盤に、北海道の中核的な文化拠点として、道内博物館等施設全体の水準の向上や活力の強化、および地域の振興に寄与するため、2014年に「北のミュージアム活性化実行委員会」を設立し、これまでさまざまな事業を展開してきました。

本年は、「平成29年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成を受け、博物館支援組織をテーマに「博物館と市民をつなぐ博物

館支援組織まつり」を10月27日～28日に開催しました。1日目に実施したシンポジウムでは、地域住民参加型の博物館支援組織のあり方について考えました。2日目に開催した体験型イベント「北のみゆぜふえす」では、北海道各地の博物館や博物館支援組織が、各地域の特色を活かし開発してきたワークショップ・メニューを、一般の方々に体験していただきました。写真は、北海道開拓の村ボランティアの会による「蚕のまゆから糸をとろう！」のブースの様子です。子どもたちの真剣なまなざしが印象的でした。


CONTENTS

- 1 研究交流事業紹介①
- 2 <対談> ロシア・サハリン州での調査を振り返って
- 3 研究交流事業紹介②
ロイヤル・アルバータ博物館の研究者2名を迎えました!
- 4 研究活動紹介
アイヌ文学から「カムイ」を学ぶ
- 6 アイヌ民族文化研究センターだより
第10回企画テーマ展「カムイとアイヌのものごたり」へのご招待
- 8 行事のおしらせ/活動ダイアリー

研究交流事業紹介 ① サハリン州郷土博物館との交流

＜対談＞ロシア・サハリン州での調査を振り返って

サハリン州郷土博物館との研究交流事業の一環として、本年は当館から2名の職員をサハリンに派遣しました。今回は、この2人に、サハリンでの調査を振り返っていただきました。

＜派遣職員＞

表溪太(学芸員、専門は動物学)

圓谷昂史(研究職員、専門は古生物学)

＜派遣期間＞2017年8月16日～30日

——サハリン雑感

(圓谷) 表さんは、サハリンは初めてでしたよね。私は、2回目でしたが、初めてみたサハリンはどうでしたか？

(表) 森の雰囲気は北海道の道北地方とよく似ていると思いました。北に行くにつれて、高山植物が低地でも見られるようになりました。

(圓谷) 私は前回、サハリンの南の方を巡りました。サハリンには手つかずの自然が残っているという印象を受けました。今回はもっと北の方に行くことができ、改めてそう感じました。

(表) そういえば、日本では絶滅したカワウソの痕跡を見つけましたよね。

——調査の目的

(圓谷) オホーツク海側と日本海側の海岸で、漂着物を記録しながら、海の影響に関するデータを集めました。貝や流れ着く人工物をじっくり見ると、地域ごとの環境の違いや海流の影響がわかります。

(表) そういえば、日本のペットボトルとかも流れ着いていましたね。



漂着物の調査をする圓谷研究職員



ブッセ湖の湖畔にて

左からマチュシュコフさん、ヴィクトリアさん、表学芸員、圓谷研究職員、セルゲイさん

(圓谷) 今回は北緯50度近くのウレゴルスク(日本海側)という町の海岸まで行きましたが、やはり日本のものが流れ着いていることを確認できました。でも、サハリンの海岸はとてもきれいで、人工物の漂着は日本と比べると明らかに少ないこともわかりました。

(表) 私は山でナキウサギを探していました。サハリンでは低い山でもたくさんナキウサギがいることを確認できました。

(圓谷) そういえば、道路のすぐそばの崖でも、ナキウサギが鳴いていましたね。

——共同調査

(表) サハリン州郷土博物館のゲナジー・マチュシュコフ研究部長が、私たちの旅をコーディネートしてくれました。すごくユニークな方でした。

(圓谷) とても親切な方でした。道中で作っていただいたイモと牛肉のスー

プは、とってもおいしかったですね。

(表) 日程の半分ほどは、浜辺でキャンプ生活でしたからね。たき火が豪快で、毎日楽しかったです。

——今後の抱負

(圓谷) これまでの2回の調査で、南サハリンの漂着物や貝類の分布状況がわかってきたので、今度はもっと北の地域に行ってみたくて考えています。北海道も含めて、北東アジアのさまざまな海岸と比較してみたいです。

(表) サハリンと北海道のナキウサギのDNAを比べてみたいと思っています。北海道ではナキウサギは高山にしかいなくて孤立した分布になっているのですが、サハリンではもっと広く分布していて個体数も多いです。そこで分布の連続性と、遺伝的な多様性の関係を明らかにしたいと考えています。

(聞き手：学芸主幹 池田貴夫)



ナキウサギの調査をする表学芸員



キャンプでたき火を囲む

研究交流事業紹介 ② ロイヤル・アルバータ博物館との交流

ロイヤル・アルバータ博物館の研究者2名を迎えました！

カナダのアルバータ州と北海道は、1980年に姉妹提携を調印して以来、さまざまな交流をおこなっています。

1998年、当館の前身である旧北海道開拓記念館とアルバータ州立博物館(=現ロイヤル・アルバータ博物館)は友好館となり、長く交流を続けてきました。2015年度には新たに北海道博物館として提携の覚書きを取り交わし、現在「寒冷地における自然と順応」というテーマのもとで共同研究を進めています。

これに基づき、去年は当館職員をアルバータ州に派遣しました。そして今年度はロイヤル・アルバータ博物館の研究者が北海道を訪れる番です。



萱野茂二風谷アイヌ資料館にて



カムイチェアノミで主催者に先祖供養を促されたポワリエさん



ジョスラン・ヒュードンさん

9月12日、ロイヤル・アルバータ博物館のジョスラン・ヒュードンさん、クレア・ポワリエさんのお二人が新千歳空港に到着しました。現在、ロイヤル・アルバータ博物館では都心地への新築移転の最終段階。来年のオープン控えお二人とも忙しい中、予定よりやや短い滞在期間での来道です。

ヒュードンさんは、鳥類学を専門とする研究者です。キンギンボクという木の実と、それを食べる鳥の羽の色の変化について興味があり、北海道での調査を昨年から楽しみにしていました。

ポワリエさんは、先住民族のコミュニティに関する事、とくに博物館に収められた儀礼に関する資料の返還等の問題に取り組んでいる研究者です。



黒岳の頂上をめざしながら調査に余念がないヒュードンさん(左)



クレア・ポワリエさん

今回の調査では、現在のアイヌ文化、博物館とアイヌ民族資料をめぐる状況などを知りたいとのことでした。

お二人の希望や関心をふまえ、当館の共同研究チームを中心に、調査地や訪問先など計画を練りあげました。そして短い日程の中、札幌市・江別市の施設や団体の訪問・懇談、北海道大学植物園の資料調査、平取町・白老町の博物館訪問、苫小牧アイヌ協会主催の行事「カムイチェアノミ」の見学、大雪山系での自然観察・調査を実施しました。

調査には当館職員も随行、多くの時間をともに過ごす中、さまざまな知見を交換し、双方にとって実り多い研究交流となりました。

来年は、再び当館からアルバータ州に職員を派遣します。なごりを惜しみながら再会を約束し、9月21日、お二人は帰国の途につきました。

(研究主幹 甲地利恵)



黒岳の頂上で！左から表学芸員、ヒュードンさん、ポワリエさん、栗原学芸員

研究活動紹介

アイヌ文学から「カムイ」を学ぶ



研究職員 大谷洋一

1960年、むかわ町生まれ。1994年より北海道立アイヌ民族文化研究センターに勤務。2015年、北海道博物館開館に伴い現職に。専門はアイヌ文学。

私は北海道立アイヌ民族文化研究センターの設立とともに、その職員となりました。私自身の研究は、まず資料収集から始める、文字通りゼロからのスタートでした。それは、アイヌ語や昔の生活を知っている人たちを訪ね歩くことから始まりました。こうして私が研究を始めた頃でも、周囲には「アイヌ語の語り手はあと十数人しかない」といった情報があふれていました。アイヌ語を身につけて育った世代が高齢化していることは事実ですが、あたかも人数がわかっているかのような言い方には大きな誤解があります。例えば、ある地域で「アイヌ語話者が一人

しかない」と言われていても、その方が亡くなると別の語り手が現れる、という現象を私はしばしば見てきました。新たに登場するアイヌ語の語り手は、自分の先輩が健在なうちは語り手として目立たないようにしていただけのことだったのです。

私はこれまで、日高地方を中心に様々な方からお話を伺ってきました。特に、平取町出身の上田トシさん(1912～2005)と小川シゲノさん(1921～2010)、日高町出身の鍋沢キリさん(1921～2005)と松島トミさん(1922～2010)、そして帯広市出身の上野サダさん(1921～2007)たちから、物語や

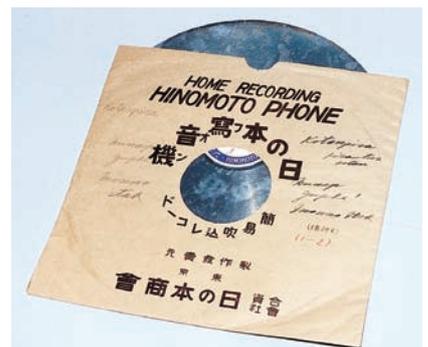
信仰に関するたくさんの教えを乞うことができました。

私は2005年までに、これらの地域で伝承されたアイヌ語による物語や歌などを約150点のデジタルテープに収録しました。その物語を日本語に翻訳して「研究紀要」等で報告し、実際の音声を聞いていただけるようにするための、音声資料の公開作業を今も続けています。できる限りの現地調査を行いながら、当センターに寄贈された「山田秀三文庫」や「久保寺逸彦文庫」のアイヌ文化に関する音声資料の内容整理・公開なども併行して進めてきました。

現在の私の研究は、実際に昔の信仰などを知る方がたから教わったことを活かしつつ、アイヌ語の物語(アイヌ文学)にあらわれるアイヌの信仰、特にカムイとアイヌの関係を探ることです。現在はアイヌ語の原文が報告されている物語(日本語訳だけのものは除きました)の内容を比較分析し、物語のジャンルごとの特徴やその中で見られるカムイとアイヌの関係性などを



アイヌ語の語り手 左から上田トシさん、鍋沢キリさん、筆者(1996年)

「久保寺逸彦文庫」のレコード
カムイへの折り言葉も録音されている

物語などを録音した保存用デジタルテープ



アイヌからカムイへ捧げる料理と穀物など
札幌市アイヌ文化交流センター「サッポロピリカコタン」にて(2017年)

検討しています。これまでに私が調査した文献は332冊、確認できた物語は1,057編にのぼります。

例えば、アイヌ民族の伝統的な考えでは、アイヌがこの世で暮らすためにカムイの加護を必要とし、カムイもまたアイヌに祭られることでカムイの世界での神格が高まるとされています。この互惠関係を維持するため、必要に応じて両者はそれぞれ相手に自分のお願いや大切な用件を伝えます。アイヌからカムイへは、主に「カムイノミ(神に祈る)」という祈りごとを行います。そこでは最初に火のカムイに対して「仲介者」としての役目を依頼し、火のカムイを通じて他のカムイへの頼みごとなどを伝えます。カムイの方からは、アイヌの「夢」の中にカムイが現れて語るなどのかたちが見られます。

このカムイとアイヌの交渉のあり方については、これまでの研究でもいくつか実証的な論考が見られるものの、論拠となっているデータが限られているなどの問題点が残されていました。私が実際に物語の内容を確認したところでは、例えば、カムイからアイヌへの意思伝達のしかたは、アイヌと実際に「面談」して用件を話したことに

なっているものが5割よりやや多く、カムイが「夢」に現れて話したというのが2割よりやや多いぐらいでした。さらに物語の文脈を見てみると、「面談」のように見える場合で

あっても、語りの上で「私は夢を見た」という言葉が省かれていると考えられる場合が多く、そうなると、物語の中では、カムイからアイヌへの意思伝達は、多くの場合「夢」によっていと言えそうです。また、「夢」の中でカムイが語ることは、すべて大事な伝言や事情であって、例えば人間を殺した魔物のようなカムイであっても、夢の中では嘘はつかないようです。

夢の中では、クマやキツネなどのカムイは必ず単独で人の姿で現れ、一方的に用件を告げます。最初に取り交わす挨拶以外にアイヌの人びとと対話する例はありません。カムイは人の姿になることによって、人と同じ言葉が発声できるようになるのではないかと考えられます。

例外的に、直接、カラスやクマなどの鳴き声をヒトの言葉としてアイヌが聞く場合も約8%近くありました。それは、個々のアイヌに憑いている「トゥレンペ(守り神・憑神)」

の能力が高い場合に聞くことができるという事例が、文献ではなく、現地での聞き取り調査で記録できました。この現象をアイヌ語で「オハイヌ(空・聞き=そら耳)」と言います。強いトゥレンペを持つアイヌは、初めてオハイヌしたことをきっかけとして、村人を救う「トゥスクル(巫術する者)」になるという物語が少なくありません。北海道アイヌの物語では最初から主人公がトゥスクルであったという例は無く、主人公が巫術を行うようになったきっかけがストーリーとして語られています。

夢に現れる様々なカムイ、仲介者としての火のカムイ、動植物の鳴き声や物音を人の声として聞かせるトゥレンペなどがいて、アイヌは世の中で起きているいろいろな事件の真相を知ることができます。アイヌ民族がカムイへご馳走や木幣を送るカムイノミの儀式を熱心に行うのは、日々の暮らしを安全に過ごすために必要なことなのです。

2018年2月2日(金)から開催する第10回企画テーマ展「カムイとアイヌのものがたり」では、最新の研究成果を活かしつつ、アイヌ文学をアニメーションやイラストなどでカムイとアイヌの関係性をわかりやすく、楽しく伝えられる工夫をこらしたいと考えています。

(研究職員 大谷洋一)



ヤナギを削った木幣 左が先祖へ、右がカムイへ送るもの

アイヌ民族文化研究センターだより

第10回企画テーマ展「カムイとアイヌのものがたり」へのご招待

来たる2月2日から、第10回企画テーマ展「カムイとアイヌのものがたり」が始まります。アイヌ民族の伝統的な世界観や信仰を、アイヌ自身が語り伝えた様々な〈ものがたり（口承文芸）〉を通して紹介していく展示です。

この展示を企画したきっかけやねらい、予定している展示の内容などをお知らせします。

総合展示室にある、子グマの檻

当館の総合展示第2テーマ「アイヌ文化の世界」。この中で、アイヌ民族の伝統的な家屋を復元して展示していますが、そのすぐ近くに、木製の檻があり、中に子グマがいます（展示では、もちろん剥製です）。



見つけた子どもたちが「クマだ！」と声を上げるなど、少し注目を集めるスポットの一つです。

でも、なぜここに子グマ？——「ペットですか？」「家畜ですか？」といった質問をいただくこともあります。でも、どちらでもありません。

アイヌ民族の伝統的な世界観では、この子グマは、クマのカムイが、カムイの世界からアイヌ（人間）の世界にやってきたのだと考えられています。だから、皆で大切に育てているのです。では、そもそも〈カムイ〉とは、アイヌ（人間）にとってどのような存在な

のでしょうか？ カムイとアイヌとの関係は……？

〈カムイ〉と〈アイヌ〉

アイヌ民族の伝統的な信仰では、あらゆるものには、なんらかのかたちで〈魂〉が宿っている、と考えられています。それらのなかでも、動物、植物など、人間に自然の恵みを与えてくれるものや、水、火、生活用具など人間が生きていくために欠かせないものや役立つもの、あるいは天候など人間の力が及ばないものなどを、〈カムイ〉と見なすのです。そして、この世界は、アイヌ（人間）とカムイとが、お互いに関わり合い、影響を及ぼしあって成り立っているものだと考えます。——当館の総合展示や『アイヌ文化紹介小冊子 ポン カンピソシ』では、〈カムイ〉について、おおよそ上記のように説明しています。



総合展示第2テーマにある「いのる」の解説パネル

大人向けに文章だけで説明するのなら、こんなふうに説明することも一つの方法だと思います。

でも、冒頭で触れたような、「クマだ！」と声を上げてくれたような子どもたちには、これだけでは、やっぱり難しい。ではどう説明すればいいのでしょうか。あるいは、どうすれば、子どもと一緒に展示をまわって下さっている大人の方がたに、「これはね、こういうことなんだよ」と、子どもたちに語っていただけるのでしょうか……。

今回の企画テーマ展は、このようなことにアタマをめぐらせてきたことが、きっかけになっています。

〈ものがたり〉の世界を通して

アイヌ民族が語り伝えてきた、たくさんの方の〈ものがたり〉には、カムイのことや、カムイとアイヌ（人間）の関わりなどについて、いきいきと伝えてくれるお話が、たくさんあります。

これらの〈ものがたり〉の世界は、カムイについての理解を深めることにとっても、よい手がかりになることが多いと思うのです。加えて、ここ数年、これらの〈ものがたり〉をいろいろな工夫をこらしながら、アニメやデジタル絵本にして、より多くの人びとに届けようとする取り組みが行われています。

今回の企画テーマ展では、これらのアニメやデジタル絵本を素材に据え、〈ものがたり〉の様々な場面を解説しながら、カムイの世界、カムイとアイヌとの様々な関わりかたなどを、たずねていきます。



当館総合展示で上映中のアニメ「白キツネのひとめぼれ」。今回の展示でも詳しく解説します！

ものがたり「小さなアワの穂」

実際のところ、〈ものがたり〉って、どんな中身なのか——。ここでは、展示で取り上げる中から、「小さなアワの穂」を、ちょっとだけご紹介します。

これは、日高地方・新冠町^{にいかつぶ}の淵瀬^{ふちせ}あきさんの（1903～1981）が語った、神話と呼ばれるジャンルの物語です。1974（昭和49）年に淵瀬さんから録音されたものを、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が2015（平成27）

年度に新たにアニメ化した作品です。

①わたしたちは はたけで
たいせつに そだてられていました



物語の主人公は、小さなアワ(粟)の穂です。(アニメでは、わかりやすいように目鼻を描いてあります。)

②でもわたしは 小さいものだから
かりとられず 放っておかれました



アワが育って、はたけを育てていた人間は穂を刈り取りましたが、小さな穂は、放っておかれてしまいます。やがて秋が過ぎ、冬になり……

③まずしいけれど 心がけのよいおばあさんが かりとってくれました



ある日、はたけを通りかかったおばあさんが、残されていた小さなアワの穂たちを見つけ、「なんとまあ、とらずにおいているとは」と言いながら、刈り取りました。

おばあさんが家に帰ると、待っていたおじいさんも、とても喜びました。

アワを搗いて団子を作ると、おじいさんは、祭壇のカミイたちにお祈りをして、この穂たちのことを話してくれました。

④わたしは カミイとして
ますます りっぱになって……



おかげで、このアワのカミイは、カミイとしてますます立派になりました。アワのカミイは、心がけの良いおじいさん・おばあさんに目をかけて、おじいさん・おばあさんは、くらしも豊かになり、アワもよく育つようになりました……。

——物語は、おおよそこんなあらすじです。

カミイたちの世界/カミイたちの姿

アニメでは、物語の最後のほうで、綺麗な衣装を着た女性が登場します(上の図がそれです)。実はこれ、アワのカミイなのです。カミイたちは、ふだんはカミイの世界で暮らしていて、そこでは人間と同じような姿をしていると考えられています。そして、何かの役割を担ったり、遊びに行きたくなったりして、カミイの世界から人間の世界へやって来ます。そのとき、アワのカミイならばアワの、クマのカミイならばクマの姿になるのだと言われています。

アワのカミイは、人間の世界では植物のアワの姿でいます。そして人間に刈り取ってもらって団子になり、食べ物としての

役割を果たすと、カミイの世界に帰っていく。人間たちが小さな穂でも粗末にせず、喜んでいてくれることで、そのカミイもますます立派になる。そういうよい心がけの人間には、カミイたちも目をかけて、また訪れてくれる……この物語には、そんな、カミイとアイヌ(人間)の関わり合いが描かれています。

いろいろな〈ものがたり〉の世界へ!

今回は、このほかに、総合展示でも上映している「白キツネのひとめぼれ」や、まわりのクマのカミイたちにけしかけられたカミイが悪さをしてしまう——という「シナ皮を背負ったクマ」などの〈ものがたり〉を取り上げていきます。今回がデジタル絵本初公開となる長編も……!

あ、それから、はじめに触れた、展示室の子グマ。これについては、展示で取り上げる「私が育てた子グマ」をごらんください!

(アイヌ民族文化研究センター長

小川正人)

行事のおしらせ 2月～3月

展示会

第10回企画テーマ展
カムイとアイヌの
ものがたり
2月2日(金)
～4月8日(日)
特別展示室・無料


イベント

ちゃれんが子どもクラブ
雪のなかで宝さがし
2月10日(土)13:30～15:00
講堂・無料
担当/舟山直治・池田真夫
先着40名(事前申込、1月11日(木)より受付)

古文書講座
はじめての古文書講座②続編(全3回)
2月18日(日)・3月4日(日)・3月18日(日)
13:30～15:30
講堂・無料
担当/東俊佑
先着80名(事前申込、2017年12月8日(金)より受付)

※行事の申込については、「行事あんない 2017年度 後期」もしくはウェブサイトをご覧ください。

自然観察会
雪の森で足跡を探そう
2月24日(土)10:00～12:00
野幌森林公園内(自然ふれあい交流館集合)・無料
担当/堀繁久・水島未記・表深太・濱本真琴・扇谷真知子(自然ふれあい交流館)
先着40名(事前申込、1月25日(木)より受付)

アイヌ語講座
見てみよう! カムイとアイヌの物語①
2月24日(土)13:30～15:30
講堂・無料
担当/遠藤志保
先着80名(事前申込、1月25日(木)より受付)

ミュージアムカレッジ
野幌周辺の動植物を探る～化石から現在まで～
2月25日(日)13:30～15:30
講堂・無料
担当/水島未記・添田雄二・表深太・圓谷昂史
先着80名(事前申込、1月26日(金)より受付)

ちゃれんが子どもクラブ
アイヌ語であそぼう!
3月3日(土)13:30～15:00
講堂・無料
担当/田村雅史、大谷洋一
先着40名(事前申込、2月4日(日)より受付)

アイヌ語講座
見てみよう! カムイとアイヌの物語②
3月10日(土)13:30～15:30
講堂・無料
講師/安田千夏氏・矢崎春菜氏(アイヌ民族博物館)
先着80名(事前申込、1月25日(木)より受付)

講演会
アイヌの物語世界
3月17日(土)13:30～15:30
講堂・無料
講師/中川裕氏(千葉大学文学部教授)
先着80名(事前申込、2月18日(日)より受付)

アイヌ語講座
見てみよう! カムイとアイヌの物語③
3月24日(土)13:30～15:30
講堂・無料
担当/大谷洋一
先着80名(事前申込、1月25日(木)より受付)

ミュージアムカレッジ
アイヌ音楽を知らない人のための
アイヌ音楽入門講座
3月25日(日)13:30～15:30
講堂・無料
担当/甲地利恵
先着80名(事前申込、2月27日(火)より受付)

活動ダイアリー 10月～12月

- | | | | |
|--------|---|--------|--|
| 10月1日 | はっけんイベント「ふしぎな物体 スライムをつくろう」(～11月26日の土日祝)開催 | 11月11日 | ちゃれんが子どもクラブ「アイヌ音楽 うたおう・おどろう・ならそう・ひこう」開催 |
| 10月5日 | 北海道博物館に貴重な資料を多数寄贈された弥永芳子氏に、知事から感謝状を贈呈 | 11月13日 | 慰霊行事(イチャルバ)を実施 |
| 10月7日 | 自然観察会「木の実・草の実のヒミツをさがろう」開催 | 11月15日 | 国連アジア太平洋統計研修所実地研修員が見学 |
| 10月7日 | ちゃれんが子どもクラブ「アンモナイトのレプリカをつくろう」開催 | 11月16日 | 平成29年度北海道立総合博物館協議会
アイヌ民族文化研究センター専門部会を開催 |
| 10月7日 | 「ジオ・フェスティバル in Sapporo 2017」に協力 | 11月19日 | ミュージアムカレッジ「アイヌ民族の刀帯-その変化を探る」開催 |
| 10月9日 | 祝日開館。学芸員ハローデスク開催 | 11月23日 | 祝日開館。学芸員ハローデスク開催 |
| 10月9日 | 「啓成 SSH in 光の広場」を共催 | 11月26日 | ちゃれんがワークショップ「稲わらで縄をつくって、長なわとびに挑戦!」開催 |
| 10月14日 | 「蝦夷和紙プロジェクト 2017」に協力 | 12月1日 | はっけんイベント「しめ縄づくり」(～24日)開催 |
| 10月15日 | ミュージアムカレッジ「早坂文嶺作の絵馬『蝦夷地・場所図』を読み解く」開催 | 12月3日 | ミュージアムカレッジ「江戸時代の日露紛争・フゴストフ事件を読む」開催 |
| 10月20日 | 第9回企画テーマ展「弥永コレクション」開幕(～12月24日) | 12月9日 | ちゃれんが子どもクラブ「文字であそぼう! 消しゴムはんこづくり」開催 |
| 10月22日 | ちゃれんがワークショップ「アイヌ民族の編みものをつくる-エムシアットの技術でプレスレット-」開催 | 12月13日 | 収蔵庫の大掃除を実施 |
| 10月27日 | 博物館と市民をつなぐ博物館支援組織まつり フォーラム「博物館における地域住民参加型組織フォーラム」開催 | 12月14日 | 臨時休館。総合展示室の大掃除を実施 |
| 10月28日 | 博物館と市民をつなぐ博物館支援組織まつり 体験型イベント「北のみゅぜふえす」開催 | 12月15日 | 臨時休館。総合展示室ほか館内の大掃除を実施 |
| 11月3日 | 祝日開館。学芸員ハローデスク開催 | 12月16日 | クローズアップ展示①～⑦ 展示入替 |
| 11月3日 | 特別イベント「ミュージアムコンサート アイヌ音楽ライブ」開催 | 12月17日 | ちゃれんがワークショップ「博物館で新年祈願!? 日本の画材で絵馬づくり」開催 |
| 11月3日 | 文化の日講演会「自然とつきあう技術-民俗学からみた自然と人間-」開催 | 12月17日 | かるちゃんnet(文化施設連絡協議会)「かるちゃんガーデン2017」(会場:Sapporo55ビル)出展 |
| | | 12月23日 | 祝日開館。学芸員ハローデスク開催 |
| | | 12月23日 | 特別イベント「博物館のバックヤードを見てみよう」開催 |

人事異動

退職(10月31日付)学芸員:春木晶子

来館者数

○2017年9月～11月
総合展示室 25,008人 特別展示室 13,489人 はっけん広場 7,358人
○累計(2015年4月～2017年11月)
総合展示室 327,520人 特別展示室 228,303人 はっけん広場 79,466人

森のちゃれんがニュース 第10号

発行日:2017年12月28日
編集・発行:北海道博物館
〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
Tel.(011)898-0456 Fax.(011)898-2657
ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>
©Hokkaido Museum, 2017